

## 1 はじめに

去る平成27年6月26日（金）14：00～17：30、京都府立鳥羽高等学校においてSGHの取り組みについて話を伺った。それに関して、以下報告したい。

## 2 鳥羽高校のSGHの根幹

鳥羽高校では、本年度からSGH指定校となり、昨年度は、アソシエイト校として取り組んできた。何もないところからSGH事業を興したわけではなく、その前提として、前年度に歴史（主に日本史）の授業において「歴史ナビ ～歩く・見る・聞くの学び」というものに取り組んでいた。具体的には、伝統都市京都が東京と比肩される近代都市<sup>\*1</sup>へと脱皮していくには何が必要とされ、どのようなことが推進されたかといった近代都市成立に必要な条件をFW（フィールドワーク）を通じて学習することがその内容である。「疎水」、「鉄道」、「市電」、「大学」、「学校」<sup>\*2</sup>、「科学」、「師団」、「公園」といった8つのテーマからなる学習を行った。そして、それぞれ生徒が学習してきたことを「授業形式」で発表するといったユニークな取り組みがなされていた。学習は、1学期に3回、夏休みに4回、2学期に4回、3学期に2回と計13回時間が生まれ、それぞれの時間のテーマに関して  
は、以下の通りである。

回数	学習課程・手順	留意点
1	テーマの共有と個々人の情報収集	タイトル・グループテーマ・ネット検索による事前調査・調査メモ作成
2	調査班の構成と班員の役割意識	前述の8テーマに分かれ確認
3	調査内容や行程のプランニングと準備	日時・ルート・内容・アポ・費用 など
4	フィールドワーク特別講義	
5	京都府立図書館においてレファレンスによる調査方法の習得	
6	「歩く・見る・聞く」調査による資料・情報収集	地図利用・画像記録・メモ・音声記録 ノートファイル等で保存

\*1 この授業を行った田中誠樹 教諭（現 教務部長でSGHの推進役）は、「京都という歴史的に前近代と言うイメージがあるが、近代都市としての京都の成立を調べさせ、全面に出すことであえてそのイメージを払拭したかった」という旨を私に説明してくれた。

\*2 鳥羽高校には、「教育勅語」と「学生に対する教育の勅諭」の原本が残っており、（この資料の多くは、戦後消却された）非常に貴重な資料も直に見せていただいた。

回数	学習過程・手順	留意点
7	個々人による資料整理	
8	「班」単位で「報告書」作成	
9	「班」単位で中間発表	
10	歴史研究ハンドブックの原稿立案作成	
11	完成したハンドブックをのちに共同発表	
12	班ごとの発表	
13	各班意見交換・評価・講評・全体テーマへの再認識確認	

以上のような取り組みがベースとなって、本年度の鳥羽高校のSGHへの取り組みがある。

### 3 SGHの組織

他校での視察でも感じたことであるが、どのくらいの規模で取り組むかがこのプログラムの正否を握っていると言っても過言でないと思う。鳥羽高校では、職員全員がSGHに関しての何らかの担当グループに入っており、組織系統もグローバル・リーダー育成推進部とグローバル・リーダー育成グループ会議が計画・立案を行っている。以下資料を参考にさせていただきたい。また、鳥羽学びのネットワーク・総合的な学習の時間・学校設定科目を用い、学校全体でSGHに有機的・多角的に取り組んでいると思われる。

### 4 具体的な取り組み

6月26日（金）現在で、第5回までの「イノベーション探求Ⅰ」を行っている。第1回目の授業では、プレストを行って現時点での京都のイメージの確認を行っている。第2回目の授業では、前回授業のまとめを行っている。第3回目の授業では、情報の共有・資料のストックといった方法を京都葵祭りをフィールドワークすることにより具体的に学んでいる。第4回の授業では、「資料論」と題し、京都文化博物館の学芸員の方から資料の持つ重要性、資料を扱う際の注意点などを探求した。第5回目の授業では、ワークショップのやり方と統計の手法、ファシリテーションのやりかたである。これらを積み重ねて2年次にさらに発展させて教養に基づく批判的思考力の育成と海外フィールドワークにより協働力、寛容力、突破力の獲得をねらいとしている「価値の研鑽」＝「グローバル・ジャスティス」といったものを習得しようとしている。

### 5 むすびにかえて

本校でも、これから本格的にSGHのプログラムをスタートさせなければならない。とりわけ魚沼学では、本校独自のカリキュラムとなる。こうしたプログラムを成功させるには、全学的な協働と各教科との連携が不可欠となるが、こうした協働連携をこれから構築していく必要があると考える。具体的な構築方法については、機会があれば論じてみたい。